

2011 年度「市民講座開催への助成」
完了報告書

つるカフェ市民講座
家で最期まで生きる

申請者 鶴岡 優子

つるかめ診療所

栃木県下野市緑 3-18-16

2011 年度前期 助成

提出 2012 年 9 月 30 日

1. 開催の概要とタイムスケジュール

概要 日時:8月25日(土) 14:00~16:30 13:30 受付
内容:つるカフェ市民講座 『家で最期まで生きる』
会場:自治医科大学 地域医療研修センター大講堂
入場無料、事前申し込み要 (当日受付可)

8月25日(土) タイムスケジュール

11:30 実行委員 集合

12:00 発表者、当日ボランティア 集合

揃いのTシャツに着替えて、準備にとりかかる

12:30 発表者と実行委員、ボランティアで記念撮影

12:40 休憩時間のコマーシャル発表順番のくじ

13:00 受付開始、駐車場や会場の整備と誘導、発表準備

14:00 開始

司会者からのオリエンテーション、開会のことば(高津戸美枝)

前座 つるカフェの概要、アンケートのお願い(鶴岡優子)

14:15 基調講演 (たんぼぼクリニック 永井康徳先生)

座長 (自治医科大学 三瀬順一先生)

『楽なように やりたいように 後悔しないように』

15:15 休憩 近日に開催される市民向けイベントの案内

1分間コマーシャル、市民講座 2件、リレーフォーライフとちぎ 1件

15:30 リレー・プレゼンテーション

『家で最期まで生きることを支えたチームの物語』

① チーム紫:84歳女性(紫さん)の最期の日々に立ち会った娘と専門職の語り

② チームローズ:83歳女性(ローズさん)の最期の日々に立ち会った息子と専門職の語り

看取りを経験した家族、専門職が壇上にあがり、リレー方式でプレゼンテーション

16:20 まとめ講演 (前原医院・栃木県医師会 前原操先生)

『栃木県の在宅医療の現状と展望』

16:30 閉会のことば (鶴岡浩樹)

17:30 懇親会 発表者、実行委員、ボランティアの有志(助成金は使用せず)

2. 実行委員会の組織構成と準備

5月に打合せを行い、つるカフェ市民講座の趣旨などを実行委員で共有した。

会議の場所は毎回下野市生涯学習情報センターのセミナー室を利用した。

第1回打合せ以降は、実行委員会を3つのチームに分けて活動した。

6月に会場をおさえ、後援の依頼、申請をおこなった。

7月、8月は各チームでの打合せを繰り返した。

- ① チーム黒子:企画運営、広報、準備全般、司会進行などの裏方仕事を担当した。
- ② チーム紫:84歳女性(紫さん)の家族、ケアマネジャー、訪問看護師、主治医4名で構成。
特発性血小板減少症、尿閉、認知症を基礎疾患に感染症を繰り返した事例。
カンファレンスを繰り返すことで、事前指示が明確になり家族が看取りを決意し、一致団結して、紫さんが家で最期まで生きることを支えたチーム。
- ③ チームローズ:83歳女性(ローズさん)の家族、ケアマネジャー、施設職員、訪問看護師、主治医の5名で構成。夫の介護中脳出血を発症、リハビリテーション中に胆のう癌と診断された。告知から在宅看取りまで本人、家族の葛藤と苦労は大変大きなものであり、専門職それぞれの立場(目線)からアプローチをおこなったチーム。

看取りを経験した家族、専門職が壇上にあがり、リレー方式でプレゼンテーションを行う手法は、はじめてのこころみであり、準備には時間と労力が必要であった。

3. アンケート結果

- 受付をした参加者は236名であった。しかし受付せず入場した者が10~20名と考えられ、参加数は約250名程度であったと見積もっている。受付票による内訳は以下の通り。

- ① 演者、実行委員、当日ボランティアなどのスタッフ 45名
- ② ボランティア以外の事前申し込み者 37名
- ③ 当日参加者 154名

専門職と一般人はそれぞれ117名と119名で一般市民が約半数参加されていた。

- 勇美記念財団からお預かりしたアンケートへの回答者は181名であった。

- ① 男性49名、女性130名であった。介護中の人は39名で約20パーセント。
- ② 男女年代別にみると、50代女性が最多で39名、次に40代女性25名と続いた。
- ③ 80代以上の人も14人と全体の7パーセント、70代以上として考えると40人で参加者全体の22パーセントとなっていた。

- つるかめ診療所からも別のアンケート(主には記述式)を行っているが、

全体の評価を最高が5点満点で聞いたところ、152人が回答し平均4.7点であった。

4. 振り返りと感想

つるカフェは2011年6月から始めた多職種連携のための勉強会である。毎回40～60名の参加者があり、講演会やグループディスカッションをおこなってきた。お茶やお菓子を用意し、顔の見える関係からお茶する関係になることで、連携のための土台作りをおこなっている。

2012年5月につるカフェ市民講座実行委員会を発足させ、市民講座の目標を明確にした。「家で最期を迎えたい」という市民は多いが、具体的な「最期に近い時の生活」を想像できている人は少ない。今回は特に、家で最期まで生きるために、在宅医療がひとつの選択肢になり得ることについて、市民と一緒に考えたかった。会場の選定は難しかったが、自治医科大学の大講堂(収容人数は500名以上)を借り、対象は比較的大人数の講演会・発表会を企画した。

第1部の基調講演は、愛媛で積極的に在宅医療を展開されている、たんぽぽクリニックの永井先生にお願いした。約1時間の講演で、日本の現状から、先駆的な取り組みまで、非常に中味の濃い内容で、具体例をあげながら「決断を先延ばししない医療」について、一般人にも医療関係者にもわかりやすくお話いただいた。大学病院関係者もご参加いただいたが、もっと多くの方に聞いていただきたい内容であった。広報についてはさらなる工夫が必要であると思う。

第2部では、介護者家族を含む在宅チームがリレー形式でプレゼンテーションをおこなった。どうして在宅医療が始まったのか、チームがどのように結成され育っていったのか、最期の日々を振り返って家族としてどう感じたのか、などをなるべく正直に語っていただいた。看取りからあまり年数のたっていない時期での振り返りであり、また地元での開催であるので、家族の心情を考慮しながら慎重にディスカッションを深めていった。複数人数でのプレゼンテーションは、初めて試みであり、準備には時間と労力を費やしたが、結果として、振り返りの時間を共有することで多くの気づきをもたらしてくれた。特に体験に基づくご家族の言葉には多くの聴衆が共感されたようで、涙を流しながら、メモをとりながら、熱心に聞き入る参加者が多かったと後で聞き、主催者としてプレゼンターとして、大変うれしく思った。

最後に前原先生にはわずか10分と時間制限がある中、栃木の在宅医療の現状と展望について、お話いただいた。まとめの段階で地元の現状を知ることは、これからの自分の役割や今後の方向を考えてもらうことにつながり、とてもよい雰囲気での閉会できたと思っている。

今回はじめて市民講座を主催したが、地元の参加者の熱心さに驚いた。医療介護福祉などの専門職だけでなく、参加者の半数が一般市民であったこと、高齢者の参加も多かったことに、今回のテーマの関心の高さがうかがわれる。いただいた感想は「自分にも家族にも最期が来ることを認識したうえで、避けることなく考えるきっかけとなった」というものが多く、継続的な市民講座の開催を期待する声をいただいている。

5月から準備してきたプロセスは、チームつるカフェの活動そのものであり、多職種をこえて多くの市民の協力も得ることができ、「オール市民」として活動できたことに大変感銘をうけている。今後も「お茶ができる」規模の小さな勉強会と、大きな講演会・発表会を繰り返しながら、オール市民での「家で最期まで生きること」を考えていきたいと思う。

5. 謝辞

今回は多くの方にご協力いただき、つるカフェ市民講座を開催することができました。ご講演いただきました永井康徳先生、奥様でボランティアとしてご参加いただいた永井直美さま、遠方より誠にありがとうございました。また前原先生に最後に栃木の現状と展望について教えていただいたことは、栃木の在宅ケア関係者と市民にとってスタートの大きな一歩となりました。誠にありがとうございました。

チーム紫、チームローズの出演者の皆様、チーム黒子と当日ボランティアの皆さま、ご後援をいただきました学校法人自治医科大学、下野市、下野市社会福祉協議会の皆様、そして、あの日あの時あの空間を共有してくださった参加者すべての皆様に、心から感謝申し上げたいと思います。今回は特に、ご家族との別れという大きな悲しみを乗り越え、勇気をもってご登壇いただきました、若生さま、生沼さま、本当にありがとうございました。

最後になりましたが、助成金をいただきました公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団にこの場をお借りして御礼申し上げます。

つるカフェ市民講座

家で最期まで生きる

参加費
無料

2012年8月25日(土)

14:00～16:30 (13:30開場)

自治医科大学 地域医療研修センター大講堂

第1部

『楽なように やりたいように 後悔しないように』

講演 たんぽぽクリニック 永井康徳先生

第2部

『家で最期まで生きることを支えたチームの物語』

主催: つるカフェ市民講座実行委員会 (事務局: つるかめ診療所)

申し込み: tsuru.cafe@gmail.com に氏名と連絡先を (当日受付も可)

後援 学校法人自治医科大学、下野市、下野市社会福祉協議会(順不同)

助成 財団法人在宅医療助成勇美記念財団